

[学級経営・学校運営]

継続的な作文活動を通して自己の生き方を考える子の育成

- 総合的な学習から広がる、心豊かな学級経営 -

小日向文人*

1 はじめに

総合的な学習の校外学習で訪れた知的障害者通所施設に行ったときである。その施設長は、「この子どもたちはとても素直でいい子たちばかりです。ここへ来ると訪れた人たちも心が洗われたようにいい子になって帰っていきます。ある学校では、手をつけられない子どもがここに来たことによって、学校での変化が見られるようになったと聞いています。」と語っていた。その時点においては、クラスに問題もなく他人事として聞いていた。

しかし、今年度取り組んでいる子どもたちは、昨年学級の統率がとれなくなり、心の乱れた状態になっていた(34名中ADHD認定1名、アスペルガー認定1名、ADHD傾向2名、自閉1名)。子どもたちは今までの5年間培ってきた人間関係の序列の中で、友達のことを信じられない、自分にも自信が持てない、自分さえよければいい、仲間のよさを見いだすことができないなど、様々な問題を抱えていた。そうした閉ざされた心を開くために、人とかかわることを主とする総合的な学習と学級経営を連動させた実践に取り組んでみた。

クラスの雰囲気作りとして、「しっとりした教室」を提案する佐藤学氏は、安心して身を任せられる人と人の関係を築き、肩を張って自己主張しなくても、一人一人の存在が自から大切にされ認められるという基本的な信頼関係が大切だと述べている。このようなクラスを作る上にあたっては、日々の授業が大切になってくる。その中でも、教材と対話し、仲間や教師と対話し、自分自身と対話する学びを授業の中心にすえることが大切だとしている。同様なことが北尾倫彦氏の自己教育力育成の実践事例集でも述べられている。そこで、人との対話、自己との対話する活動を総合的な学習に求め、自己を振り返り見つめ直す活動に取り組んだ。

その主たる手だてとして、活動後の作文を積み重ねていくことにした。〈上越市立高志小学校の脱ピラミッド超研究開発でも、「書くことは考えること」「書くことは見つめること」「書くことは振り返ること」と書くことで、子どもたちはさまざまな力を伸ばしていくと述べられている。〉継続的な人とのかかわりと作文活動、そして、仲間との相談活動によって人間関係を修復し、心豊かな子どもたちに育っていくのではないかと考えた。この系統立てた総合と学級経営との編成を試みたので、ここで報告する。

2 本実践のねらい

書く活動をすることによって、自分の活動の軌跡をたどることができ、後戻りすることはない。さらに振り返りが可能で自己内対話を容易にすると考える。また書くことで、物事を冷静に客観的にとらえることができると考える。

3 方法 (対象：2年間にわたる6年生 15年度46名 16年度34名)

15年度の6年生は、5年生、6年生の持ち上がりの学年の中で総合的な学習を通して、計画的に人とのコミュニケーションや生き方を考えられる取組みを行った。落ち着きもあり、集団としてまとまりのある学年だった。しかし、16年度の6年生は、5年生の時は教室が乱れ、授業が成立できない状態で、4月当初も人間関係の中で、心を開けず明るさを見ることはできなかった。その学年を受け持つにあたって、今までの学級経営のやり方を参考にしながらも、別の角度から子どもたちの心を開いていくために、心に秘めた言葉を文章化し、心の形跡が見られるように継続的に作文活動に取り組んだ具体的な留意点として以下の4点を設定した。

① 書くことを苦しめない継続的な環境をつくる。

今まで書く活動をしてこなかった子どもたちにとって、作文を書くという作業は大変なものである。各教科の中で

* 新潟市立大淵小学校

継続するのも難しいので、連絡帳に一日の日記として3行書くということからはじめる。そこから少しずつ増やしていけば、書くことを習慣化できるのではないかと考えた。いろいろな個性のある子どもたちがいるので、それに合わせた指導の仕方を工夫する必要がある。(最終的には10行書けるようになった)

② 自分の変化を探る継続的な福祉作文活動を構成する。

心の乱れた子どもにとって、お年寄りや障害者への印象はあまりよいものではない。その率直な気持ちを最初の授業で引き出すためにも、子どもたちの今までの生活スタイルを否定せず自由に書かせることによって本音を引き出すことをねらいとした。また、活動のたびに560字づめの原稿用紙に作文を書いてくることを宿題とし、書き重ねることによって、自己のわずかな変化をとらえることができると考えた。その際には、気持ちの面には赤ペンなどはいっさい入れず、直すのは、字の誤りや句読点の誤り程度に抑えた。赤ペンを入れることは、指導者の気持ちを押しつける結果となり、自ら考える意欲を失ってしまうと考えたからである。

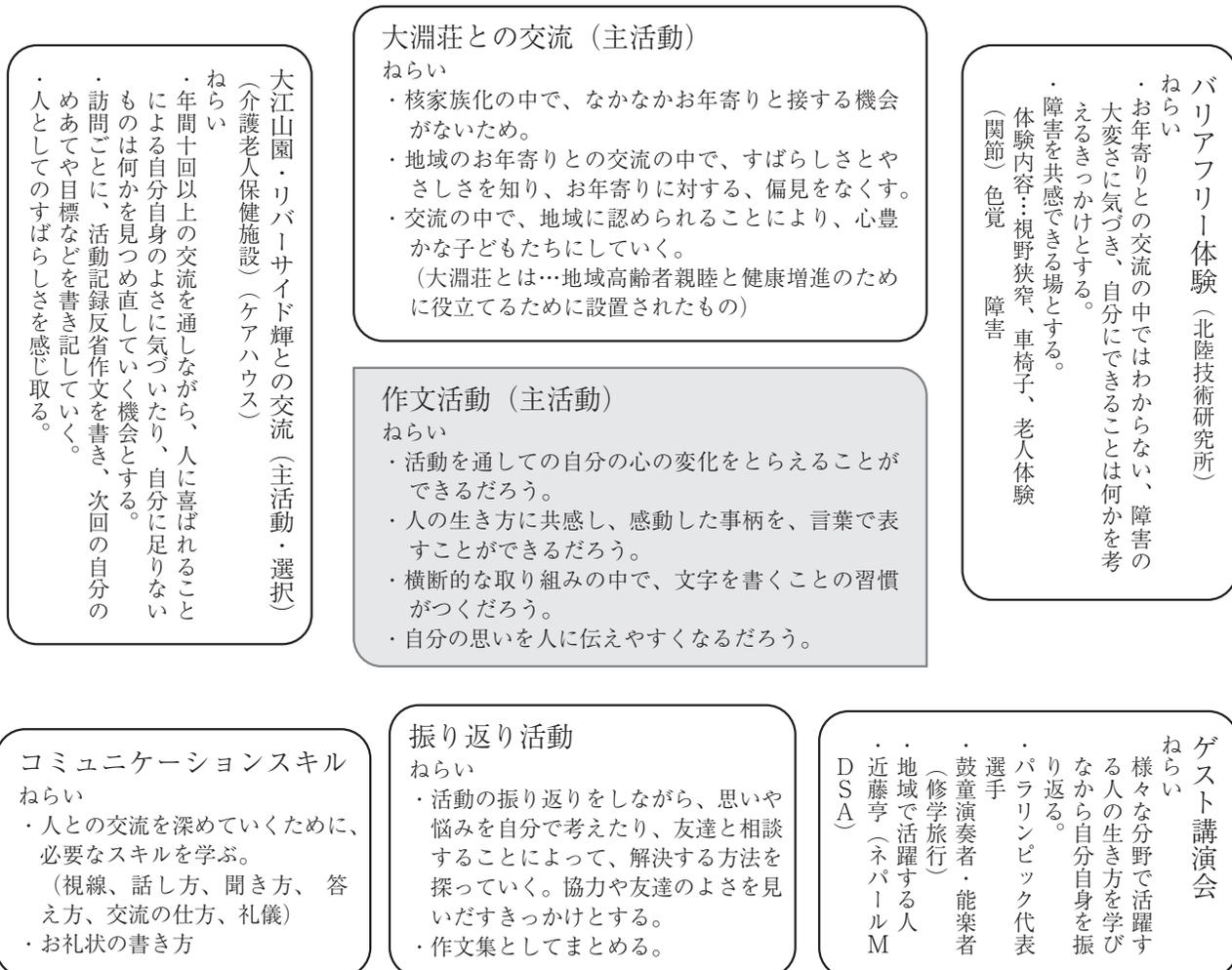
③ 自己を振り返り、友達のよさを見出す学級会・話し合い活動を設定する。

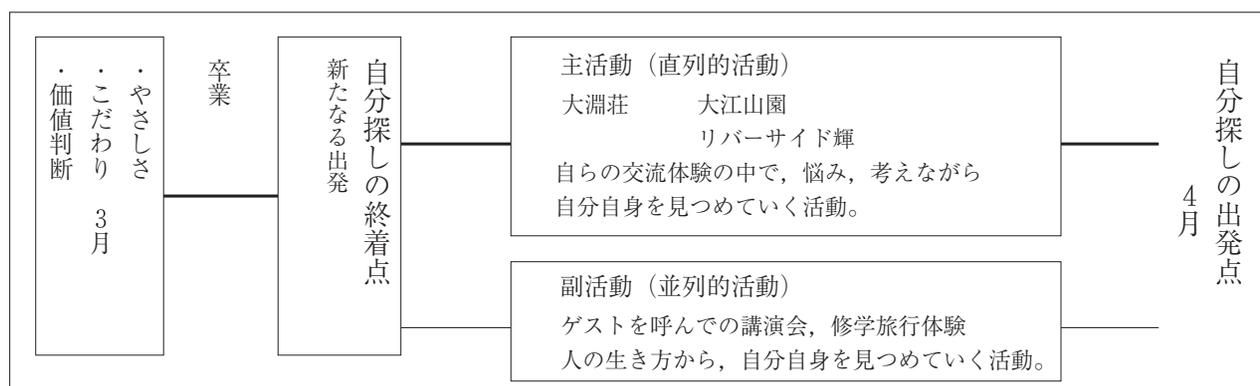
少人数のグループで、それまで書いてきた作文を読み合い、良かったところや悩んだことを話し合う。そうすることによって、友達同士の共通理解が生まれ、友達のよさを感じられると想定した。

④ 人との出会いや感動を促す総合的な学習と関連付ける。

継続的な老人福祉活動を続けることも大切なことだが、十数回の活動の中においては、子どもの意識の中でマンネリ化がおき、学びとして課題が見つげにくくなってしまふ。そこで、複線的な活動として、人として生きてがんばっている人をゲストに招き入れたり、福祉を学べる別の場を学習することにより、別の角度から作文を書くことによって、新たな見方ができるのではないかと考えた。

4 活動 本実践は次のような概要である。





5 児童の作文（抽出）から読み取れる心の変容

1) 相手のことを共感的にとらえていたり、相手とコミュニケーションを図ろうとする子ども

- 大江山園の初めの印象は、ある程度しっかりしているお年寄りでした。しかし行ってみると、車椅子に乗ってちょっと頭がおかしい人もいました。「こんにちは」といっても、何も言ってくれませんでした。 6月 1回目
- 七夕飾りを一緒に作りました。飾りの作り方を教えてあげました。やってくれうれしかったです。完成してしゃべっていると、二人のお年寄りは話してくれたけど、もう二人は、話してくれません。でも、他の友達が、そのお年寄りと話すと話していました。ほくは、どうしてなんだろうと思いました。 6月 2回目
- ほくは、「また老人の人たちと話ができなかったらどうしよう」と思いました。今日は、塗り絵をしました。一緒にやりながら、話もしました。はじめ、「年はいくつですか。」と聞くと、「ん～。わからない。」と言われ戸惑いました。それでも、話を続けました。絵が完成すると、そのおばあちゃんは、ほくの絵が欲しいといってきました。あげると、おばあちゃんは、「自分の部屋に張ってくれ」と職員の人にいていました。ほくはとてもうれしかったです。これからは、もっと、お年寄りと話をしていきたいです。 7月 4回目
S.S男

このS.S男は、お年寄りに対してのはじめの印象は、悪い方が多かった。1回目の訪問時においても「頭がおかしい人」は、何も言ってくれなかったというように、気持ちの面で見下げているところがある。しかし、2回目の訪問時には、自分には何も言ってくれないのに、友達はうまく交流しているという姿を見る。そこで、自分自身に何か問題があるのではないかと考える。4回目では、心をうち解け、うまく話せるようになってきている。戸惑いながらも相手の立場になりながら交流を図れるようになってきている。さらに、あまり絵が上手ではない本人と一緒に共同で作ってきた絵を、お年寄りが部屋に張りたいたと言っていたことに対し、自分自身がお年寄りから認められたという喜びが沸き上がっているような感じがする。

訪問活動を繰り返していく中で、お年寄りというものを認めるとともに、自分を認めてもらったことにより自信にもつながってきた。人に認められることの喜びが、相手を認めることの大切さに気づかせるとともに、互いに認め合う姿勢を育ててきている。学級経営の基本ができあがってきた例だといえる。

2) 客観的に見た自分自身に気づき、自分を深く見つめようとする子ども

- パラリンピックに参加するMさんに、「自分と同じような障害を負った人を見て友だちになろうと思いますか。質問すると、予想していなかった答えがかえってきました。Mさんは、「車椅子に乗っていても、心は同じ人間なんだから、すぐには仲良くなれない。」と話してくれました。私は、助け合えるや自信が持てるという答えを考えていました。わたしは、それを聞いてすこし、差別していた自分が恥ずかしくなりました。みんな同じなんだということに気づかされました。 11月 Y.S子

このY.S子は、一番感受性が強く、お年寄りとの活動や障害者との活動においても積極的に取り組んできた。しかし、Mさんに質問したとき、当然、「同じ障害者同士だから仲良くする。お互いに助け合っていく。」という答えがかえってくるものだと考えていた。しかし、返ってきた発言は、全く逆なものだった。それは、同じ人間なんだから、

相手によって好き嫌いはあるということだった。私たちでもすぐに人とは仲良くはなれない。今まで、同じ人間として考えていなかった自分自身に反省し、心のどこかに差別していた気持ちがあるということに気づくことができた。

Y.S子は、強い信念を持って取り組んでいるM選手に対し、自分自身に差別する気持ちがあったことに気づかされる。障害を持っていても、大きな夢に向かって取り組んでいる姿を見て、自分自身のちっぽけさを感じるとともに、自分もこれからはがんばらなくてはという気持ちを持つことができるようになっていく。障害者を見下ろして見ている自分からあこがれに変わっている彼女を見つけることができる。

3) 日常的な実践力が身に付いてくる子ども

- 私は、大江山園に行くのが楽しみでした。それは、母もそういう仕事をしているからです。はじめていったとき、隣にFさんというおばあちゃんがありました。そのおばあちゃんは、歌を歌いながらも、ずっと、私のことを気にしてくれていました。心温かい人なんだなと思いました。 6月 2回目
- 今日は、重度の障害のある人と交流しました。コミュニケーションをとるのが難しいし、敬語で話せばいいのか、普通に話せばいいのかわかりませんでした。今日は、みんなは楽しかったと行っていただけ、私にはもやもや感が残りました。あと、気持ち悪い。さわりたくない。と思ったことも事実です。いろいろ考えながら活動していきたいと思います。母にも、相談してみたいと思います。 6月 4回目
- Sさんは、おじいさんと仲良く楽しそうに話していました。すごいなと思いました。あと、今日、職員の人が素手でおばあさんの口元についたヨーグルトを拭いてあげていました。私は、気持ち悪がってできないと思います。私には、まだ、本当のやさしさが身に付いていないのだと思います。 7月 6回目
- 私は夏休み、母に頼んで、老人福祉施設に行ってボランティア活動をすることにしました。母の姿を見ることで、自分ができなかったことを自分の力で何とか克服できるようにしていきたいと思います。
(母とともに夏休み中、4回のディサービスのお手伝い) T.S子

この児童は、5年生の時もっともトラブルの多い子、教師ともぶつかっていた。また寂しさの中で友達を独占しようとする行動も見られた。また、家庭的には夫婦の確執、同居する祖父母と父との姿の中でお年寄りに対して、やさしさを感じるができなかった。しかし、活動を通して、お年寄りからのやさしさを感じ、自分自身の心にも素直になれ、友達の頑張りをも感じ取ることができるようになってきた。さらに、今まで友達と一緒にいなければだめだった自分自身を変えるために、母の職場での奉仕活動にも取り組んだ。夏休み明け、「先生、私、前の私とは違うんです。信じてください。」この子どもの訴えかけるような発言があった。自信に満ちた満足そうな表情をしていた。また、母の仕事に対する理解と尊敬が家族の円満につながり、家庭的なトラブルも少なくなってきた。

だめだった自分自身を変えるための夏休みの取り組みは、今までの自分の弱さを克服するだけでなく、弱者に対して自然にやさしくすることができる身近な存在を見たことによって、自分自身もそういう人間にならなければいけないと感じ始める。また、その後の活動の中で、障害のある人に対しての偏見をなくし、相手との距離感を縮めようとする姿が見られるようになっていった。

◇◇◇◇年間の活動記録及び予定◇◇◇◇

3月	2月	1月	12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	4月
<ul style="list-style-type: none"> ・各施設にありがとうコンサート ・卒業式への招待 	<ul style="list-style-type: none"> ・大淵荘清掃活動 ・一年間の活動体験発表会（保護者、5年生に対して） 	<ul style="list-style-type: none"> ・お世話になった人たちへの年賀状書き ・大江山園クリスマス演奏会に参加 ・第四回振り返り活動：まとめ作文集の制作 	<ul style="list-style-type: none"> ・第三回振り返り活動 ・依頼交渉：児童 ・パラリンピック代表選手の講演会（講演依頼交渉：児童） 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションスキルトレーニング（3回） ・大江山園、リバーサイドとの訪問依頼交渉を子どもたちの手で行い始める。 ・施設での悩み相談を保護者指導者を交えて行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールムスタンの近藤亭さんを招いて講演 ・大江山園、リバーサイドとの訪問依頼交渉を子どもたちの手で行い始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大江山園納涼祭に自主参加 ・交流活動再開。大江山園との交流に加え、リバーサイド輝との交流を開始。（選択性） ・能楽者、鼓童の人との交流（生き方を考える） 	<ul style="list-style-type: none"> ・大江山園運動会に参加（自主） ・車椅子ラグビー練習見学 ・第一回振り返り活動タイム ・北陸技術研究所にて、高齢者、障害者体験 ・第二回振り返り活動（一学期を振り返って） 	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟甚句、俳句指導、清掃活動 ・ボランティア活動の基礎知識 ・大江山園との交流開始 ・（週1回2時間 3月まで継続的に） 	<ul style="list-style-type: none"> ・大淵荘との交流（5回） ・高齢者や障害者に対するイメージマップ 	<p style="text-align: center;">活動の記録</p>

4) 友だちのよさに気づいたり、相手の見方に変化が見られる子ども

- 今日、私は体調が悪く、友達の様子を見ることにしました。みんなお年寄りの人と仲良く話していて楽しそうでした。中でも、素敵だなと思った人は、SさんとTさんでした。やさしく話しているし、いつも笑顔がありました。私も、次はお年寄りとお友達を作るという目標を立てて頑張りたいです。 6月 4回目
- 今日は、Mさんから話しかけてくれることもあって、いろんなことをはなす事ができました。ずっと私の手を握り、私の方を見ながら話してくれたのでうれしかったです。Mさんから昨年の6年生のW.Hさんに「ありがとう」と伝えて欲しいと頼まれました。その人は、大江山園にくるたびに、Mさんのところに行って話してくれたそうです。それが心に残っていて、何度も何度も頼まれました。私も、Hさんのように、名前を覚えてもらえるくらい親しくなりたいと思います。 7月 6回目
K.N子

集団としてのまとまりを欠いていた5年生の時、このK.S子は、何も言えず心の中で悩んでいるような子どもだった。周りに対する不信感で、他者のよさを見いだすことができなかつた。しかし、この活動を通して、1対1でお年寄りにつきあう中で、人の温かさを感じることができるようになった。また、友達の素敵な活動の姿を見ることによって、友達のよさを見いだすことができた。さらに、お年寄りとの交流の中で昨年度の6年生のすばらしい活動に感銘を受け、私もそういう自分になりたいという目標を持つことができるようになってきている。

具体的な行動から、ステップアップしていく姿が他の子どもへも大きな影響を与えている。悩みを打開するために自分を取り巻く周りの人間から学ぼうとする姿がクラスの中に広がってきている。人の温かさやすばらしさを感じ取ることのできる親和的な雰囲気がK.N子によって生まれた。

6 考察

老人福祉活動を主活動とした総合的な学習をこれまで3回行ってきた。最初は、ワークシートや作文などその時々に応じてプリントを作成してきたが、次第に、活動＝作文につなげて活動を行い、半年で20枚以上の作文を書いてきた。書き慣れない子どもたちにとって、抵抗はあったが、書くことに対する意義や書くことの楽しさを伝えることによって、一人一人が自分の思いを素直に書き記すことができるようになった。

作文活動において、34名それぞれに、物事に対する見方や感じ方は違っていたが、書きためてきたことによって、一人一人の成長の跡が感じ取ることができた。5においては代表的な作文4つをのせたが、それ以外の子どもたちの作文にも心豊かなやさしい言葉や自分自身を見つめる内容が数多く見られた。こうした継続的な作文活動の子どもの変容の要因を整理すると、下記の5点にまとめることができる。

① 書くことによって葛藤が生まれる

お年寄りとの交流によって、今まで持っていたイメージが大きく変わる。お年寄りに優しくしてあげられる自分がある、笑顔がもらえ楽しく活動する自分がそこにいることを作文に書いたとき、ふと自分の学級に目を向けさせたとき、友達関係の中で、やさしくしてあげられない自分がいたり、笑顔を出せない自分がいたりすることに気づく。なぜ、同じくできないのかを、

また書かせていくことによって、自分自身に葛藤が生まれ出されてきた。その後、交流し書き留めていった作文を読み返した後に、4月初に行ったイメージマップと同様のものを渡して書かせてみた。その結果、お年寄りのイメージはもちろんのこと、交流していない障害者や友達に対するイメージも明らかに良い方に変わってきていた。このことから、振り返りを形として残す作文によって、葛藤が生まれ出され、善悪の判断をおのずからつけることができるようになったと推定できる。

② 書くことによって、追求の足取りをはっきりととらえることができる

それまでの子どもたちの生活行動は、注意されてもすぐに忘れてしまい、同じ過ちを繰り返すことが多かった。しかし、書く活動をはじめることによって、お年寄りとの交流で感じたことを素直に書き留め、それを繰り返すことによって、ふと自分自身に立ち止まり振り返ったときに形として残っている作文を読み返すことによって、自分の変化に気づくことができた。そのとき、「君は、どうしてこのときと気持ちが違うようになったんだろうね。」と働きかけることによって、自分自身の変化への気づきがさらに深まっていった。形あるものによってそれが根拠となり、振り返ることが可能となった。振り返りができるようになって生活行動の中でも大きな乱れはなくなってきた。

	老人のイメージ		障害者のイメージ		友達のイメージ	
	良い	悪い	良い	悪い	良い	悪い
4月	73	259	4	102	57	36
9月	171	30	51	60	84	21

16年度児童 イメージマップより

③ 日常のいろいろなことに結びつけて書くことができる

老人福祉活動ではマンネリ化してしまうところで、さまざまな人や場を与えたことによって、また新鮮にかつあらたな見方をもってお年寄りにつきあえるようになった。(心にゆとりを持たせる) 多くの人との出会いをまた書きためることによって、自分自身を振り返り、家族の今ある姿を考え、これから自分はどのようにしていくべきなのかを考えるきっかけにすることができた。

④ 書くことによって深く見詰め、よりよい関係を築こうとする視点を持つことができる

老人福祉活動では、一人一人がお年寄りと1対1で活動してきた。教室内では認められてこなかった子のお年寄りとの接し方を見ることによって、友達に対する新たな見方が広がってきた。それを作文の中に書き留めていくことによって、自分と比較した友達のよい面を見ることができるようになってきた。話し合い活動でも、素敵な友達発表として多くの子の名前が挙げられていた。言われた児童もうれしそうにしていた。関係を築けない子どもに対しての配慮がこれからの課題になると思う。

⑤ 書く活動を行うことにより、集中力が高まり、忍耐強くなる

自分の思いを込めた作文を書くことが苦手な、初めは、書いても文末には、「～。」「……。」と表現でごまかしたり、字を大きく書いて行数を増やす子どもが多く見られたが、日々の継続の中や子どもの心に残る出会いによって、子どもたちは書く表現を高めていくことができた。それにともない、学習においても静かに集中して物事を考えられる子どもたちが育ってきた。

7 残された課題

今回は、去年の経験を生かし、書く活動のよさを追求しながら学級経営をよりよくしていこうと考えてきた。書きたくなるような気持ちを持たせ、よき題材とふれあわせ、教師の構えも一定の大筋を持ちながらも、子どもたちのそのときの様子に合わせるなど課題の出し方も変えてきた。気持ちよく書くことにより、自分の本音の部分を語る事ができる。そうやって書きためていったものが、一人一人の成長の足跡となっていった。また、そうやって子どもたちが、がんばって書いてきたものに対して、ひとつひとつ声がけをすることも子どもと教師とのふれあいの時間となり、子ども一人一人を大切に取れる学級経営になるものと感じ取ることができた。

しかし、作文活動によって、クラスがすぐに良くなるとは限らない。作文の内容だけが良くても、子どもの本質が変わらなければ何一つ成果はない。そのために我々が良い題材や経験、出会いを多くさせ、そのために時間をかけてコーディネートすることが大切になってくる。さらに作文は心の葛藤が現れ出るまで、じっと待つことが大切だと考える。その葛藤が持てるようになった時、本当の自己教育力のスタート地点に立ったと考えられる。

しかし、学級経営においてこれがベストというものはない。子どもたち一人一人の個性が違うように、クラスの雰囲気も違う。教師がゆとりを持ち、柔軟に対応すること、クラスの状態に合わせて、学級経営としてどの教科がかみ合うかを考えながらベストな状態を作っていくことが、これからの課題になってくると思う。

引用文献

北尾倫彦 「自己教育力育成の実践事例集」 図書文化社 1990年 pp. 8-9

佐藤 学 「授業を変える 学校が変わる」 小学館 2000年 pp.33-34

佐藤 学 「学力を問い直す」 岩波ブックレット 2001年 p.59

上越市立高志小学校 「超研究開発『脱ピラミッド』」 上越市立高志小学校 2002年 p.20